

最新！宗教情報 ////////////////////////////////////// No. 5

◎オバマ大統領「イスラムと新たな始まりを」カイロで演説

【朝日新聞、6月4日、カイロ＝平田篤央】オバマ米大統領は4日、エジプトを訪れてカイロ大学で演説し、「世界中のイスラム教徒と米国の上に相互の尊敬に基づく新たな始まりを求め、ここに来た」と訴えた。ブッシュ前政権でイスラム世界に広まった反米感情を和らげたい、との意図がにじみ出た。

演説は約1時間にわたり、イスラム過激派や中東に対する外交政策を広範に説明した。ただ、中東和平などで新たな具体的な提案はなく、就任以来進める対話路線を改めて強調した形だ。

第一に取り上げたのは過激派対策。国際テロ組織アルカイダなどとは厳しく対決する姿勢を示した。一方で、アフガニスタンに兵力や軍事基地を維持する考えはないと述べ、米国が地域の支配権を確立する意図を否定した。

また、軍事力だけで問題は解決できないとして、社会開発や経済援助も強調。「イラクでの出来事が外交の必要性を思い出させた」と述べた。

中東和平では、イスラエルに入植地を凍結するよう明確に求め、「米国はパレスチナ人が国家を持つとの願望に背を向けない」と説明。2国家共存による解決を訴えた。

際立ったのは、核開発を進めるイランに対する融和的な姿勢だ。断交している両国関係の歴史では「冷戦時代、民主的に選ばれたイラン政権の転覆に米国は役割を果たした」と自国の非にも触れた。そのうえで「多くの問題について前提条件なしに話し合う用意がある」と対話と呼びかけた。

今回のカイロ演説には、民主化団体から「エジプトの長期強権政府の容認につながる」との批判が出ていたが、オバマ氏は「他国が体制を押しつけることはできないし、すべきでもない」と述べ、距離を置く姿勢をみせた。

■ <http://www.asahi.com/international/update/0604/TKY200906040293.html>

■ スピーチのスク립ト

http://www.whitehouse.gov/the_press_office/Remarks-by-the-President-at-Cairo-University-6-04-09/

終末論の論点

- 「今すでに」と「いまだなお」の間の緊張関係
- A.シュバイツァー、徹底的終末論
 - 黙示文学的預言者としてのイエスの発見
- J.モルトマン、W.パネンベルク（1960年代）
 - 黙示文学的終末論の再評価
 - 終末論の社会的次元の回復
 - モルトマン『希望の神学—キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』（原著1965年）
- 解放の神学、黒人神学などにおける終末論の再評価
 - 終末論の社会変革的次元の強調

13

近年の聖書学の成果

- 切迫した神の国の到来を史的イエスに帰することが自明ではなくなってきた。
 - 神の国の切迫性は、イエス伝承の編集者に遡るという理解
- 神の国の非黙示文学的解釈の台頭。
 - J.D.クロッサンは現在の「知恵志向的」（sapiential）、かつ貧農を中心とする神の国運動にイエスを位置づける。知恵の教師イエス。

14

4. 現代における終末論の展開

15

終末論の現代的展開の一例

- オウムによる地下鉄サリン事件（1995年）以降、異常な行動を正当化してしまう異常な世界観として終末論がクローズアップされた。
 - 参照：イスラーム過激派による自爆攻撃
- オウムには、世界の「将来」を見定める「最終責任者」としての自負があった。
- オウムはキリスト教の終末論（特に「ヨハネ黙示録」）を利用していた。

16

終末論のポジティブな側面

- 「個」の確立
 - 自ら責任を負う「個」としての人間を発見する。「個」の強度を育む。
- 社会の現実に対する批判的視座
 - 社会変革的次元へのいざない

17

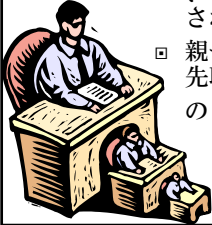
終末論のネガティブな側面

- 最終的な責任を自分以外の権威者や集団にゆだねてしまう。
- なぜ、高度な教育を受けた者たちが、オウム流の終末論のとりこになってしまったのか？
- オウムの終末論と、「教育家族」に潜在する終末論は「共振」関係にある。

18

世俗化した終末論

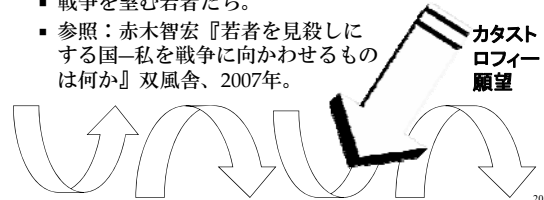
- 「しっかり勉強しないと、よい学校に入れない。よい学校に入れないと、よい就職ができない」といった人生き路が親から子に伝授される。
- 親や教師は、子（生徒）の人生を先取りし、将来を予言する、現代の「予言者」である。



19

なぜ「終わり」を求めるのか？

- 「終わりのない日常」から脱するため。
 - 終わりが無い ≠ 先が見えない
 - 先が見えすぎる社会 = 「透明度の高い社会」（均質性の高い社会）
- 差別構造が崩壊することを望むため。
 - 戦争を望む若者たち。
 - 参照：赤木智宏『若者を見殺しにする国—私を戦争に向かわせるものは何か』双風舎、2007年。



20

終末論の可能性と展望

- 社会を変革する力として
 - 「宗教は阿片である」（マルクス）のか？
 - 解放の神学に代表される「耐え難き現実」を変える力
- 運命論（世俗化した終末論）への挑戦
 - 社会的不平等（構造的暴力）、生物学的運命論（遺伝子決定論）の拡大に対して
- 宗教多元社会における指針
 - 死、病、テロなど人間の限界状況に対する理解と応答
 - 特に、イスラームの終末論に対する理解

21

「終わり」の視点

- 「『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけな。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」（マルコ13:6-7）。
- 虚偽の「終わり」に抵抗し、多様かつ豊富な「終わり」の視点を獲得していく必要性。

22

終末論の参考文献

- 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年。
- ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス—あるユダヤ人貧農の革命的生涯』（太田修司訳）新教出版社、1998年。
- ユルゲン・モルトマン『希望の神学—キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』（高尾利教訳）新教出版社、1978年。
- ユルゲン・モルトマン『神の到来—キリスト教的終末論』（蓮見和男訳）新教出版社、1996年。
- リフトン、ロバート・J『終末と救済の幻想—オウム真理教とは何か』（渡辺学訳）岩波書店、2000年。
- 池内恵『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』講談社、2002年。

23